敏腕コンサルと甘く淫らな同居生活始めます

Miyabi & Sakuya

小日向江麻
Ema Kobinata

エタニティ文庫

目次

敏腕コンサルと甘く淫らな同居生活始めます　5
甘いワナにはご用心！　219
書き下ろし番外編
ハートのエースに永遠の愛を　317

敏腕コンサルと
甘く淫らな同居生活始めます

プロローグ

「えっ、別れるってどういうこと？」
「その言葉通りの意味だよ。別れよう、オレたち」
突然すぎる久嗣の宣言に、目の前が真っ暗になった。
別れるだなんて、わたしと彼には無縁な言葉だと思っていた。だから、その意味が一瞬、わからなかったのだ。
――別れるって、わたしと久嗣が……？　彼氏と彼女の関係じゃ、なくなるってこと？
「じょ、冗談でしょ。だってついこないだ、付き合って半年の記念だねって、お祝いしたばっかりだし、そもそもわたしたち、喧嘩もしないで上手くいってたじゃない。それなのに何でいきなり」
自分でも早口になっているのはわかる。けれど、一息に言わずにはいられなかった。
――そんなはずはない。

付き合ってちょうど半年の記念日デートで、久嗣は「これからもよろしくね」なんて囁いて、わたしに優しくキスしてくれた。あのときの唇の感触を、まだ鮮明に覚えているのに。
テーブル全体を大きなパラソルが覆っていても、七月中旬の日差しはギラギラと攻撃的だ。テラス席で向かい合って座るわたしと久嗣に、容赦なく、そして執拗に照りつける。
気を取り直すように、わたしは目の前にあるグラスを片手で持ち上げた。外の気温に耐えかねて汗をかいている筒型のそれから伸びるストローに口をつけて、中身を飲む。
さっきまでアイスティーの味がしていたのに、今は何の味もしない。
「とにかく、もうそんな気じゃなくなったってこと」
「わかんないよ、それじゃ」
「つーか理解しろよ、普通に」
ごねるわたしに、丸テーブルの向かい側から久嗣が苛立った声を上げる。
――あれ、と思った。
いつもにこにこと温かい笑みを向けてくれていた彼が、今は不機嫌そうな、怖い顔をしている。
口調や言葉の響きも、これまで聞いたことのない冷たいものだ。まるで全く別の人と

話しているようにさえ思える。

そういえば、今日話があると呼び出され、この席に座ったときから違和感を覚えていた。

これまで久嗣は、「できるだけみやびちゃんの近くにいたいから」とか言いつつ、わたしと横並びで座るのを好んでいた。それなのに、今日はわたしとの間に椅子を一つ挟んで座ったので、珍しい、と思っていたところだった。

「理解なんて――」

わたしが再度口を開いたとき、久嗣はそれを遮るように両手をテーブルについて立ち上がった。

「言葉で説明しなきゃわかんないのかよ。オレは単純に、オマエに飽きちゃったわけ。一緒にいても楽しくないし、全然ドキドキしない。女として見られない」

辛辣で直球な言葉が、鋭い刃となってわたしの胸にブスブスと突き刺さる。

今まで呼ばれたことのない「オマエ」という呼称の違和感に反応できないまま、後に続く言葉で心が致命的なダメージを負う。

「だから別れる。もう連絡しないでくれよ。てか、されても返さないから。じゃあな」

「ちょ、ちょっと待ってよっ、ねぇってば……！」

久嗣は言うだけ言ったあと、これで用事は終わったとばかりに歩き出した。

引き留めようとするわたしに一瞥もくれず、彼は逃げるように早足で席から遠ざかっていく。

ほんの数分前まで目の前に座っていたはずの彼は、人混みに紛れてすぐに見えなくなった。

「……嘘でしょ」

呆然と呟きながら、再びアイスティーを口にする。やはり味のしない液体が、ただただ喉を通りすぎていった。

「うわー、人がフラれるとこって初めて見たわ……」

「ヒサンだねー。かわいそー」

さっきまで他愛もない話題で盛り上がっていた、後ろのテーブルの若い女子ふたり組。彼女たちのヒソヒソ声が耳に入って、心に刺さる。

認めたくないけれど……おそらくわたしはたった今、フラれたのだ。

久嗣との仲は順調そのものだと思っていたのに、それは大きな勘違いだったらしい。

交際期間はおよそ半年。彼からの熱烈なアプローチで始まった恋の結末は、思いのほかあっけなく終わりを迎えた。

まるで砂糖菓子のような、ひとときの甘い夢だったのではないか――。そう思えるくらい、本当に束の間の幸せな時間は、あっさり消えた。

「……最悪」

咥えたストローを奥歯で強く噛んだ。それから、やり場のない気持ちを吐き出すみたいにして呟く。

突如訪れた失恋に打ちひしがれているわたし——若林みやび、二十六歳。

しかしこの直後、更なる大きな不幸がわたしに襲いかかるだなんて——このときのわたしはまだ、知る由もなかった。

1

衝撃の出来事から三日。明るさとポジティブさが取り柄のわたしは、早くも失恋の痛手から立ち直りつつあった。

別れたその日に、久嗣と共通の友達である佳奈から電話が来て、彼が二股をかけていたことを知ったのだ。それも、わたしは本命ではなく二番目だったというのだから、驚きを通り越してもはや感心してしまう。よくもまぁ、半年間も隠し通せたものだ。

このタイミングで別れを切り出したのは、本命の彼女と結婚話が持ち上がったためだそうだ。わたしとの関係を清算しなければ、破談になると思ったらしい。

佳奈は仲間内から久嗣の結婚の噂を聞きつけ、すぐに連絡をくれた。しかし、既に別れを切り出されたあとだと告げると、わたしの気持ちを代弁するように彼を詰っていた。

「ありがとう、でも意外とわたし、平気かも」

フラれたばかりで強がりに聞こえたかもしれないけど、その言葉に嘘はなかった。

もちろんショックは大きいし、悲しい。けど、どこかでせいせいしている部分もあったからだ。

別れ際のあの冷酷な態度が彼の本性なのだとすると嫌悪感が募るし、もっと関係が深くなってから発覚するよりは何倍もマシだと思えた。

まぁ正直なところ……わたしも二十六歳になったし、このまま結婚までまっしぐら——なんて想像も、していなくはなかった。それは認める。

だけど恋愛はなかなかどうして、思い通りにはいかないものだ。

……とにかく、久嗣との半年間は、悪い夢でも見たと思って忘れよう。それがいい。

モヤモヤした思いを抱きつつも、わたしはそう、自分に言い聞かせた。

ところが——心の平穏を願うわたしに再び悲劇が起こった。それは、久嗣と別れた一週間後の夜だった。

「みやびちゃん、ちょっといいかしら？」

夕食のあとの、一日の疲れを癒やす心地良い時間。
わたしはリビングのソファに寝転び、ぼんやりとテレビを眺めていた。すると、キッチンから水の流れる音とともに、自分を呼ぶ母の声が聞こえてきた。
「何？」
優しくか細い母の声は、聞き取りにくい。わたしは、手にしていたリモコンでテレビの音量を少し小さくしてから、声を張って訊ね返した。
キュッという金属質な響きがして、水音が止まる。ほどなくして、パタパタとスリッパの底を鳴らしながら、リビングに母が来た。
「大事な話があるの。お父さんを呼んでくるわね」
「……う、うん」
五十二歳という年齢に似合わずいつもほわほわとした雰囲気の母が、今は口元を引き締め、どことなく不安そうな表情をしている。それが引っかかり、おのずとわたしの返事も、驚きと困惑が入りまじったものになる。
何となく不穏に感じてテレビの電源を落とし、リモコンをローテーブルの上に置いた。
母は、三階にいる父を呼びに行っているようだ。
ソファから身体を起こしたわたしは、無意識に脚を揃えて姿勢を正した。
――もしかして、お店に関する話だろうか。なんとなく、そう思った。

わたしの家は、小さな洋菓子店を営んでいる。その名も、『洋菓子の若林』。そこは、わたしの父・雄介と、母・真理枝が、東京の片隅で二十四年間、一生懸命守り続けてきた洋菓子店だ。ひとり娘のわたしは、その二代目にあたる。
パティシエになって自分の城を持つのが、父の昔からの夢だったらしい。
都会のパティスリーのような派手さや華麗さはないけれど、食べるとホッと一息つけるような、温かみのあるスイーツが売りのこぢんまりとしたお店だ。
華やかな都会のパティスリーを余所行きのオシャレ着にたとえるなら、我が家はヘビロテしたい普段着といったところだろうか。
わたしは、普段の生活の中にフィットするこの店が大好きだ。
三階建ての賃貸物件である我が家は、一階が店舗、二階と三階が住宅になっている。最寄り駅から徒歩五分という立地のよさで、賃料はかなりお高め。
それに加え、製菓のための厨房と包装室を兼ねた物件を別に借りているので、その分の賃料も払っている。毎月その賃料を捻出するのが非常に厳しく、実は過去何度も滞納していたりする。
もともとは、ここまで経営は厳しくなかった。しかし時代の波というのかなんというのか……。昔ながらの地味な『洋菓子の若林』は、年々、お客を減らしていた。
不運は重なって一年前、お店の目と鼻の先に、全国展開のケーキショップ『ヤミー

ファクトリー』がオープンしたのだ。それからは、ただでさえ少なくなっていた客足が、ガクンと減った——それはもう、はっきりと、わかりやすいほどに。

「やっぱりお客さんは、どこでも食べられる慣れた味のほうに行ってしまうのかねえ」なんて、寂しそうに笑う両親を見るにつけ、わたしの胸はズキンと痛んだ。

けれど、そのままでいいはずがない。

落ち込むふたりを元気づけなきゃと、わたしは自分なりに様々な提案をし、行動にも移していた。

例えば、季節ごとに新商品を発案してみたり、オリジナルバースデーケーキの受注製作を勧めたりとか。

……けれどこれらの試みは、現在に至るまで、売り上げアップにはほとんど繋がっていない。

それらを考えると、母があんなに改まった口調で切り出すのは、お店のことで間違いないだろう。

——また、売り上げが下がったのかもしれない。

そんな思考を巡らせているうちに、両親が揃ってリビングに入ってきた。そして、L字ソファの端に座るわたしと身体を向かい合わせる形で、ふたりがそこに腰かける。

父は母より三つ年上の五十五歳。昭和生まれの職人の割には、感情の起伏が少なく、

家族思いだ。改めてこうして顔を突き合わせてみると、昔より顔や肩幅が一回り小さくなったように思う。

仕事以外はほとんど興味がない、仕事一筋な人。だから、部屋着のスウェットも色が上下ちぐはぐな組み合わせだけれど、気にしている様子は全くない。

しばらくの間、言葉を探すようにして沈黙する両親。その妙な空白に先に耐えられなくなったのは、わたしだ。

「話って何なの、改まっちゃって」

努めて明るい口調で言う。ふたりの言葉が、わたしと同じトーンで返ってくるのを期待したのかもしれない。けれど——

「もう、一家心中しかない。お父さんたちと一緒に、覚悟を決めてくれないか」

「はあっ!?」

わたしは一瞬、父が何を言っているのか全く理解できなかった。

「ごめんね、みやびちゃん。私たちも、こんな形で終わるなんて考えてもみなかったんだけど……でも、仕方ないのよ」

母は話しながら、両手で顔を覆って泣き出した。

父がそんな母の膝にそっと触れ、慰めるように言う。

「オレがふがいないばっかりに、すまなかったな、真理枝。最後まで苦労かけて」

「いいえ、私、幸せだったわ。あなたと結婚して、みやびちゃんっていう可愛いひとり娘も授かったんだもの」

「そうだな。終わりこそこんなだったが、俺たちの人生も悪くはなかったよな」

「ちょっ、ちょっと待って待って、ストップ！　勝手に人生を締め括ろうとしないでよ！」

目の前のふたりが湿っぽい三文芝居を始めたものだから、わたしは両手を前に押し出し、制止するようなジェスチャーをしながら喚いた。

「みやびちゃん……」

わたしの顔を見つめて弱々しく呟く母に、さらに語気強く続ける。

「お母さん、メソメソ泣かない！　それにお父さん、いきなり心中とか物騒なこと言わないでよっ。まずはどういうことなのか、わかるように説明して！」

「わ、わかった……実はな――」

父がたどたどしく説明を始めた。

店の経営は悪化の一途を辿っていて、家賃は三ヶ月も滞納している状態にある。そんな状況を案じた大家が、このまま家賃を支払えない状態が続くのなら、立ち退いてくれと言ってきたそうだ。

ここを追い出されたら、他に行く当てなんてないし、別の場所で再出発する余力がうちに残っているわけもない。

だから、こうなったらもう、首をくくるしかない、と。

そうは言っても一家心中とは……

「何か方法はないの？　――その、お金を借りたりとか」

「心当たりは全部当たったが、無理だった」

「……そう」

「あと一つだけ方法があることはあるが――」

「あるんだ!?　何？　それを教えてよ！」

困った様子で言った父の言葉を遮って、先を促す。

「それが……」

父が歯切れ悪く言い淀み、となりの母はそんな父の反応を見て、一層激しく泣いている。

「……蛭田さん、いるだろ」

「ああ、うん」

わたしの眉間に、無意識のうちに皺が寄る。

蛭田幸三――我が家の大家だ。

とはいえ、彼とかかわりをもつようになったのは、つい最近のこと。それまで私たち

が借りている物件の所有権は、別の人物にあった。それが訳あって、蛭田さんに代わったらしい。

わたしはこの蛭田という男が、反吐が出るほど嫌いだ。

蛙に似たアイツの顔を思い出し、背筋に冷たいものが走った気がして、ぶるりと身震いする。

つい先日還暦を迎えたという蛭田さんは、下町の繁華街で数多のいかがわしいお店を経営している。そればかりか、一夫一妻制のこの国において、なんと三人の妻がいるのだ。しかも、妻のうちふたりは二十代だというのだから、本当にとんでもない。

父と娘、いや下手すると祖父と孫ほど年が離れた女性と結婚する神経が理解できないし、妻が三人もいるというアウトローすぎる家族構成も当然受け入れられない。

そもそも「三人と同時に婚姻関係は結べないんじゃないの？」と疑問に思ったけど、どうやら本妻以外のふたりとは、養子縁組をしているらしい。そこまでして無理やり戸籍を繋ぐなんて、その執念に恐怖すら覚える。

蛭田さんの嫌いな要素はいくつも挙げられるけど、一番頭にきたのは店をバカにされたことだ。

一度、蛭田さんがお客として店にやって来たことがあった。もともと蛭田さんのことはいけ好かないヤツだとは思っていたけれど、それでも新しく大家になった人だし、い

い印象を持ってもらわなくてはと、わたしは好意的に接客しようと思った。

ところが、アイツは店に入るなり「センスがない」「薄汚い」「古い」、さらには買った菓子をその場で食べて「不味い」と散々に貶してきたのだ。挙句――

「こんなしょうもない店、早く畳んだらどうだね？　でなければ、負債が増すだけだ」

……悔しかった。

両親とともに、コツコツと一生懸命作り上げたかけがえのないものを全否定されて、わたしはとうとう我慢できなくなった。

「アンタに何がわかるのよ！　もうここには来ないで!!」

大家相手に理性を欠いた発言なのはわかっている。でも、言わずにはいられなかった。

怒った蛭田さんは「何様だ、無礼な！」と顔を真っ赤にして帰っていったけれど、心の中でその言葉をそっくりそのまま返しした。

――ああ、蛭田さんなんて聞いたら、あのときの怒りが蘇ってきた。

「で？　その蛭田さんがどうかしたの？」

「実はな……蛭田さんが、ある条件を呑むなら、店を続けても構わないって言うんだ。それも、家賃は未来永劫支払わなくていいとも言ってる」

「何それ」

わたしは目を瞠った。あの嫌味な男が、そんな温情をかけることなんてあるんだろ

うか。

「で、条件って何なの？」

先を促すと、父は顔を俯けて小さくため息を吐いた。

それから、よく耳を澄まさなければ聞こえないような、小さな小さな声で呟く。

「その、みやびを……嫁にほしい、と」

「嫁!?」

「みやびを、四番目の妻にしたい。蛭田さんはそう言っていた」

「……」

――それって、わたしが四番目の妻として蛭田さんと結婚するってこと？

想像しただけで気分が悪くなって、口元を押さえた。そして。

「ない！　絶対絶対絶対ぜーったいに、ない、無理だから!!」

わたしは嫌悪感も露わに叫んで、ぶんぶんと左右に首を振った。

いやだ。いやだ。いやだ――死んでも、それだけは、絶対いやだ!!

「首を振りすぎて眩暈が……」

「だ、大丈夫か、みやび？」

頭がぐわんぐわんする。

額を押さえるわたしを心配した様子で、父が声をかけた。

わたしは父に噛みつかんばかりの勢いで反論する。

「大丈夫なワケないでしょっ、誰があんなヤツとっ……だいたいわたし、アイツとケンカしたんだよ。お父さんとお母さんがいないとき、お店で」

あのときの蛭田さんは酷く腹を立てていた。そんないけすかないはずのわたしを、たとえ嫌がらせのつもりでも、自分の嫁に迎え入れるはずがない。

「蛭田さんから聞いた。どうやら、あちらはみやびのそういう、気の強い、はっきりしたところを気に入ったみたいなんだ」

「そんなこと言われても！」

ちっとも嬉しくなんてない。いや、むしろ蛭田さんから異性として興味を持たれている、と知って、悪寒が止まらない。

「……わかってる、みやびが蛭田さんを毛嫌いしているのは知っているし、もちろん父さんたちも可愛いひとり娘をこんな不本意な形で嫁に出したくはない。だがこの話を断ったら、我が家はおしまいなんだよ」

この世の終わりとばかりに頭を抱える父を見て、それまで嗚咽を漏らすだけだった母が口を開いた。

「ここを追い出されたらお店は諦めなきゃいけないわ。そうしたら、家も職も失うわけでしょう。私もお父さんも歳だからなかなか再就職先もなくて、生活もままならないで

しょうし……」

ようやく話の全貌が見えてきた。

店を継続させるには蛭田さんから家賃の援助を得るしかない。でも、そのためには、わたしをアイツに売り飛ばさなきゃならない。

両親はどちらも選べないのだ。お店もわたしも、どちらも大事だから。

「だいたい、長い間菓子作りしかしてこなかった父さんと母さんに、他に生きていく術なんてあるわけがないんだ。生き恥を晒すくらいなら、店を畳む前に人生ごと畳んでしまったほうがいい」

父がブツブツと極論を繰り出すと、母は妙に優しい笑みを浮かべわたしを見た。

「大丈夫よ、みやびちゃん。眠るようにあちらへ逝ける方法もあるってお父さんと調べたの。だから心配しないでね」

「お母さん」

何が「大丈夫」なのか。何が「心配しないで」なのか。

母の異様な台詞を聞いて、眉間に力が入る。

「睡眠薬をいっぱい飲むのは失敗したときが厄介だ、って本に書いてあったから、やっぱり一酸化炭素中毒がいいかしらね。狭い部屋にガスを充満させる方法なら手軽でしょう」

「ぶ、物騒なこと言わないでよ」

縁起でもない——と突っ込んではみたものの、どうしよう。母の目が笑っていない。顔は笑っているのに、目だけは悪霊にでも取りつかれたかのように病的で、生気がない。

いや、母だけじゃない。よく見ると父も同じ目をしていた。

「誰が一番最初にあっちに逝けるか競争しようか」

「うふふ。そうねお父さん、負けないわよ」

虚ろな目をして笑う両親。ふたりとも、解決法はそれしかないのだと信じているようだ。

「家族三人一緒なら、何も恐れるものはない。天国でも一緒にお菓子屋さんをしような」

「あら、向こうでもお店が開けるなら、楽しみになってきちゃったわ。ねえ、みやびちゃん？」

「楽しみなわけないでしょ、いい加減にして！」

もう聞いていられない。わたしは、現実逃避しようとする両親を一喝した。

「お父さんもお母さんも、悩みすぎておかしくなっちゃったわけ？　一家心中なんて間違ってる、正気に戻ってよ」

父と母――ふたりをしっかりと見つめて言った。
「どっちも選べないから心中だなんて、そんなの一番ダメ。お嫁に行かないで、お店も続けられる方法を探そうよ」
真剣な訴えは、ふたりに届いたらしい。どこか遠くを見ていた父と母は、眠りから覚めた直後のようにハッと表情を変えた。
「わ、悪かった。確かに、まだ若いみやびにさせるようなことじゃないよな。だけど、そんな方法なんて……」
父が困惑した様子で項垂れる。その様子は、考え尽くしたあとだと言いたげだ。
わたしは、暗い気分を振り切るように笑顔を作った。
「今は考えつかないだけで、ちゃんとあるかもしれない。そのベストな考えに辿り着いてないだけかもしれないでしょ？」
「みやびちゃん……」
母の瞳に、微かに光が戻った気がした。その様子に安心して、話を続ける。
「結論を出すのはまだ早いよ。立ち退きの期限はいつまでなの？」
わたしが訊ねると、父が顎に手を当てて、少しの間逡巡する。
「月末まで、ということになってる」
「月末か」

頭の中で七月のカレンダーを思い浮かべる。
あと二週間もない。
しかし、二週間もある、と考えることもできるはず。これだけの期間があれば、起死回生の案を思いつけるかもしれない。
わたしは勢いよく立ち上がると、ぐっと拳を握った。そして、まだ不安そうな表情をしている父と母に強く宣言する。
「時間はまだあるんだから、諦めないで頑張ろう。お店を続けられる方法を、わたしも一生懸命考えてみる！」
弱気な両親を鼓舞するようにみせかけて、実は自分自身を勇気づけていたのかもしれない。
そう。諦めたら一家心中コースだ。
大好きな『洋菓子の若林』は、わたしの居場所で心の拠り所。
なくなるなんて……そんなこと、あってはいけないんだから！
蛭田さんのいいようになんてさせない。家族とお店は、わたしが守る。
このときには、もう失恋のことなんて頭からすっぽ抜けていた。終わった恋愛が思考に入り込む隙なんてない。
今のわたしは、生きるか死ぬかの瀬戸際にいる。とにかくどうしたら仕事や家族を失

わずにすむのかを考えなきゃ。だから、クヨクヨしていても仕方がない。
前を向く。行動する。それしかないんだ――

2

「はぁ……」
閑古鳥の鳴く店内。
そのレジの傍にある、細かな傷だらけのカウンターに突っ伏したわたしは、今日何度目なのかわからないため息を吐いた。
蛭田さんと結婚せずに、お店を続けられる方法を考える――なんて宣言したものの、その具体的な方法を何一つ思いつけないまま、時間だけがすぎていた。
来月も家族三人でこのお店を続けるためには、家賃を納めなきゃいけない。
経営不振の我が家が短期間で資金を調達できるとしたら、方法は三つ。
一つ目、誰かから借りる。
これは父が親戚や友人といった心当たりと再度連絡を取ってくれたけれど、全滅だった。ならば銀行から融資を受けられないかと当たってみるものの、家賃を滞納している

我が家が信用されるはずもない。そのセンはあっさり消えた。
二つ目、店での売り上げを当てにするのではなく、別口で働いて稼ぐ。
悪くはない案だと思ったけれど、残り時間はわずかだ。この短期間で目標額まで稼げるような仕事なんて、ロクなものじゃない。これも消えた。
で、三つ目。棚ボタを狙う――具体的には、蛭田さんの気が変わるのを待つ、とか、こちらから借金を申し込んだ人が、やっぱり貸してあげるよと言ってくれるのを待つ、とか。もっといえば、無条件に救いの手を差し伸べてくれる人が現れるのを期待する、とか。神様に祈る、とか。
……とにかく、ひたすら、運がこちらに向いてくれるのを待つ、というものだ。
「そんなの、上手くいきっこないよなぁ～……」
わたしは脱力しながら弱々しく呟いた。
わかってる。そんな都合のいい展開、あるわけがない。
あまりの情けなさで涙が出そうになる。
言わば、ドン詰まり。身動きのできない状況にあるということだ。
……マズい。一家心中の結末が、リアルに迫ってきている。
焦れども、一向にお客さんがやってくる気配はない。
わたしは、助けを求めるようにエントランスの扉を見つめた。

白い木の枠にガラス窓のついた扉から、外の様子を少しだけ窺(うかが)うことができる。
駅から近いため、人通りは結構あるのに、通りかかる人のほとんどが、この店に興味を持たない。
——どうしてこんなことになっちゃったかなぁ。
もう一度ため息を吐いた。落ち込んだところで解決にはならないと思いつつ、考えずにはいられない。
わたしがまだ幼いころは、それなりに繁盛(はんじょう)していたはずなのだ。お正月にバレンタイン、クリスマス。季節のイベントごとに、両親は忙しそうだったから。
だけど、わたしが小学生になり、中学生になり、高校生になるにつれて、お客さんの出入りがどんどん減っていった。
決して仕事の手を抜いているわけじゃない。いつ見ても両親は真面目に働いていたし、父の作るお菓子は常に最高の出来だった。
とくに、パウンドケーキは絶品だ。味ももちろんだけど、見た目が抜群に可愛らしい。パウンドケーキというと、お酒に漬(つ)けたフルーツやナッツの類(たぐい)を生地にまぜて焼いた、全体的に茶色っぽく素朴なお菓子のイメージ。
だけど父が作るそれは、バニラ味とストロベリー味のマーブル生地に、ストロベリージャムで作った硬めのゼリーをハートに模(かたど)って流し込んである。

贈答用やおもたせに選んでもらえることが多く、オープンから現在までこの店の一番人気を守り続けている、特別な品物だ。
わたしがこのパウンドケーキを愛するわけは、もう一つある。それは、この商品が誕生した理由にあった。
父が初めてこの商品を作ったのは、まだお店を開く前、もっと言うと母と結婚する前のこと。シャイな父は、甘いものが大好きな母にプロポーズするとき、自分の得意なお菓子で母に気持ちを伝えることができないかと考えたらしい。
母は部屋を訪ねてきた父からお土産(みやげ)のケーキを受け取り、ナイフでカットする。断面の中心に大きなハート型が現れ驚く母に、父がすかさずプロポーズをしたそうだ。
女性の好みにうとい父が、どうしてこんな可愛らしい商品を生み出すことができたのか、ずっと気になっていたのだ。しかし、そのエピソードを聞いて、なるほど、勝負をかけて作ったお菓子だったからか、と、嬉しい気持ちになった。
だけどそれは、父の娘であるわたしだから思えることなのかもしれない。
近隣に『ヤミーファクトリー』ができ、今の時代に合ったキャッチーで写真映えするようなスイーツが珍しくなくなって、いつの間にかこのパウンドケーキは見向きもされなくなってしまった。
……うちのだって、負けていないのに。

レジ前に置いてある、小分けにカットしてラッピングされたパウンドケーキに視線を落として、さらにため息を吐いた。

――いけない、いけない。ため息を吐くと幸せが逃げるんだっけ。

こんなに連発していたら、ただでさえ欠乏している幸福がまったく寄りつかなくなってしまう。

めげてはいけないと思い顔を上げると、入り口の扉に人影が見えた。

……お客さん？

チリンチリン、と扉に取りつけてあるベルが涼しい音を立てる。

「いらっしゃいま……せ」

その音に続いてかけた声が一瞬詰まる。

入ってきたのは、スーツを着た若い男性だ。歳はわたしと同じくらいか、少し上といったところだろうか。一目見ただけでドキッとするほどのイケメンだ。こんなにカッコイイ人、そうそうお目にかかれない。

レジ横の置時計を見ると、現在の時刻は十二時すぎ。

ランチどきであるこの時間は、皆お菓子ではなく昼食を取るため、一日の中でももっともお客さんが少ない時間帯だ。

誰か来たとしても、近所に住む主婦がどこかへ出かけるときの手土産を買ってくれるくらい。男性の、しかもビジネスマンの来訪はかなり珍しい。

わたしは改めてその男性に視線を戻した。

ネイビーのスーツにライトブルーのシャツ、そしてライトグリーンのネクタイという装いが目を引く。

この暑い時季にネクタイをきっちりと締めているとは、何て生真面目な人なんだろう。

男性はわたしにちらりと視線を送ったあと、店内をぐるりと囲むように陳列してある焼き菓子を眺めた。

パーマのかかったふわふわとしたマッシュヘアが柔和な雰囲気なのに対し、奥二重のキリッとした目元と高い鼻からは、シャープな印象を受ける。そのアンバランスさが妙に魅力的で、本当に文句なしの美男子だ。俗っぽい表現だと、塩顔のイケメンってヤツか。

こんなにカッコイイ人が店にやって来ることなんてないから、変に緊張してしまう。

レジ付近にある冷蔵のショーケースと、それを挟むように置かれたラッピング済みの半生菓子や焼き菓子などの棚を、男性はときには中腰になって熱心に見つめている。

横顔だと、スッと通った鼻筋が余計に強調されて、思わず比べるように自分の鼻に触れた。

全体的に顔のパーツが小さいわたしとは、全然違うつくりの顔。

それにしてもこの塩顔イケメン、やけにじっくりと商品を見ている。
何を買うべきか、悩んでいるんだろうか。
「何かお探しですか？」
それならばと、わたしはカウンター越しに声をかけた。
「よろしければご案内しますが」
高揚感からか、ついワントーン高い声が出てしまった。仕事ではあるけれど、彼に話しかけているという事実にドキドキする。
「……」
彼はわたしの声に反応してこちらへ視線を向けたものの、返事をしなかった。
「お持ち帰りですか、それとも贈り物ですか？　贈り物でしたら、当店ではこちらのパウンドケーキがおすすめです」
わたしは向かって左にある棚の最上段に並べられた、例のパウンドケーキを手で示した。
彼の視線がパウンドケーキに向けられる。すると彼は一瞬目を瞠り、「あっ」と小さく言葉を発したように感じた。それから少しの間、ケーキをじっと見つめる。気に入ってくれたのだろうか。
「カットすると、中心にハート型のゼリーが現れるようになってます。可愛いと仰って下さる方も多く――」
「……パッとしない店だ」
商品説明に入ろうとしたところで、彼が唐突にわたしに身体を向けてそれを遮る。
「え？」
「パッとしない店だ、って言ったんだ。店内も暗いし、まず雰囲気が古い。まぁ、店舗自体が古いのもあるんだろうけど、クロスも扉も経年劣化で見栄えが悪すぎる。お化けでも出てきそうなくらいにな」
「なっ……」
一言目では理解できなかったけれど、ようやく真っ向から店を否定されているということに気がついた。カッとしたものが込み上げる。
――コイツ、何て失礼な！
反射的に、蛭田さんのことを思い出した。
「配置も適当だし、商品も……今日、俺が何人目の客だ？」
しかし、蛭田さんのときとは違い、男性の言い方には、嫌味な感じもなければ、責めるような響きもなかった。ただ純粋に、質問しているだけのようだ。
そんな訊き方のせいもあってか、言われた言葉の割に、不快な気持ちにはならなかった。そのため蛭田さんのときとは違って、ついつい素直に答えてしまう。

「……ひとり目」

すると、彼は肩を竦めた。

「だろうな。これじゃ客が来ないのも頷ける。流行らない店の典型だ」

「っ～～ちょっと！　いったい何なんですか？」

いや、やっぱり腹が立つことは立つ。

「失礼じゃないですか！　そんな、入ったばかりで、何がわかるっていうんですか？」

「店に入って三十秒見れば、六割はわかる。残りの四割は味だが」

「ならうちのお菓子を食べてから文句言ってよ。四割は味なんでしょ、あなたの理論では」

何を偉そうにのたまってるんだろう、この男は。少し前まで彼をイケメンだと評していた自分にさえ怒りを覚えた。

勢いのままに、わたしはレジ脇の籐のカゴからラッピングされたパウンドケーキを掴み取り、ずいっと前方に突き出した。

「はい！」

「これを、味見していいのか？」

「ええどうぞ。うちで一番売れてる自信作なので」

彼はわたしの手からパウンドケーキの包みを受け取ると、透明なセロファンを、花びらを一枚ずつ摘まむように丁寧に開いた。

「いただきます」

律儀にそう口にしたのは意外だった。初対面でズケズケと文句を言うくせに、最低限のマナーは心得ているようだ。

彼はまず一口、長方形の角の部分を齧った。バニラビーンズのまじった白色のバニラ生地と、薄ピンク色のストロベリー味の生地がマーブル模様になっているパウンドケーキを、彼は表情を変えないまま、ゆっくりと咀嚼して呑みこむ。

今度はマーブル生地と、ハート型に埋め込まれた赤いゼリーの部分を一緒に口にした。そのとき、一瞬彼の鋭い瞳が大きく見開かれたように思えた。

――どうなんだろう。

わたしは、彼がケーキを食べる姿を、何か大事な儀式でも見守るように見つめて、感想を待つ。

「……美味しい」

彼の唇から零れたのは、予想に反する言葉だった。

蛭田さんに「不味い」と言われたこともあり、今回も酷評されるかもと思っていたのに。

彼は確認とばかりにもう一口ケーキを齧る。

「うん、美味しい。レベルの高いパウンドケーキだ。生地の口当たりや水分値もちょうどいいし、中央のパート・ド・フリュイも食感がよくて、酸味が心地いい。ケーキと一緒に食べたときのバランスも申し分ない」

「ど、どうも……」

パート・ド・フリュイとは、中心にあるハート型のゼリー部分を表す製菓用語だ。

食べてみてから評価しろとタンカを切ったのはいいけれど、一転してべた褒めされると、逆に強く出られなくなってしまう。わたしは面食らいつつ、たどたどしく礼を言った。

というかこの人、パート・ド・フリュイなんてよく知ってたな。ある程度お菓子に詳しいか、興味があるんだろうか。

スイーツと縁の薄そうな若い男性がその単語を口にするのは、違和感がある。

いつの間にかケーキを食べ終えていた彼は、やはり「ごちそうさま」と小さく口にしてから、セロファンを手のひらで丸めた。わたしはそれを受け取り、レジ下のごみ箱に捨てる。

「ほ、褒めてくれたなら……さっきの言葉、撤回してくれますか？」

あれだけ称賛してくれたなら、冒頭の評価は覆るはずだ。

「さっきの言葉？」

「だから、パッとしない店だとか、そういう」

「パッとしない店であることは変わらない。そこは撤回しない」

どういうことだ。美味しい、レベルが高いと褒めちぎってくれたのに。

理解できないわたしを尻目に、彼が話し続ける。

「ただ、客の来ない店だと言ったのは撤回する。この味なら、多少なりとも客はつくはずだ。それなのに、あまり繁盛している様子がないのは……何か心当たりでもあるのか？」

こちらを窺う奥二重の瞳が、鋭く光る。

決して冷やかしで訊ねているようには見えなかった。その真剣さに、わたしもついつい口を開いてしまう。

「……近所に『ヤミーファクトリー』ができてからは、お客さんが離れていっちゃって。それまでは、あなたの言う通り、お客さんに困るほどじゃなかった」

「なるほど、競合店のせいか。あそこは経営陣が若いから、流行を取り入れた新商品をバンバン出してる。そういうのが好きな若者は、そっちに流れるだろうな」

わたしの答えを聞くと、彼は口元に手を当てて言った。

――この人、何でそんなことを知ってるの？

そう疑問に思ったとき、扉のベルが鳴った。

「あー、暑い暑い。ちょっと涼みに来ましたよ――おや、先客がいるなんて珍しいこともあるものだねぇ」

店に入ってきたのは、あの蛭田さんだった。

恰幅のいい蛭田さんは、その身体をはち切れそうな黒いスーツで包んでいる。趣味の悪い紫色のシャツをはだけさせた胸元には、いかにもな金の太いネックレスが覗いていた。

「お客さんも、涼みに来たのかい。それとも……閉店セールに来たのかな？」

……相変わらず、コイツは他人を不快にさせるのが得意だな。

一歩、一歩。歩みを進めるごとに、たるみきったワガママボディがぶるぶると揺れる。

蛭田さんは男性に近づき、ギョロッとした大きな目で男性を見つめると、ニヤリといやらしく笑いかけた。

のっぺりとした平坦な顔なのに、目だけがギラギラとしているのが気持ち悪い。

サラダオイルを塗ったかのように脂ぎった肌のこの男は、いつ見ても蛙を彷彿とさせ、嫌悪感が募る。

蛭のくせに蛙だなんてどういうことだ――なんて、心の中で悪態をつく。

「閉店セール？」

男性は不思議そうに蛭田さんに訊ね返す。

「ああ。この店は今月末で畳むことになってるんだ。このありさまで、家賃を三ヶ月も滞納してるんだよ。大家としても困ったものだよねぇ」

「……本当か？」

男性の問いかけに、わたしは首を横に振る。

「そうならない方法を、今考えてるの」

ぼそぼそと、まるで蚊の鳴くような声で呟くのが精いっぱいだった。

でも、両親のためにも、店は畳みたくない。その希望を捨てるつもりもない。

すると、蛭田さんは気分よさそうに顔を綻ばせた。

「ということは、みやびちゃん♪　僕の四番目の妻になる決心がついたんだね。嬉しいよ～！　ご両親からその気はないようなことを聞いてたから、僕は寂しかったんだよ？」

名前を呼ばれただけで、背筋に冷たいものが走る。

どうやら蛭田さんはわたしの言葉で、自分の出した条件を呑むつもりだと解釈したらしい。

蛭田さんの傍らに立つ自分をイメージしてしまい、鳥肌が立った。

「誰が！」

冗談じゃないと、わたしは顔を背けて一蹴した。

すると、蛭田さんはニタニタと笑いながら、ねちっこい声色で訊ねてくる。

「じゃあ三ヶ月分の家賃、きっちり払える目処がついたってことだね？」
「……それは」
「払えないなら嫁に来るしかないよねぇ。店は続けたい、でも嫁には来ないなんて、そんな都合のいい話はないよ？」
「……」
蛭田さんの言葉に何も言い返すことができない。
今のわたしに、この状況を打開するようなアイデアなんてない。
でもだからといって、ヤツの要求に素直に従うなんて無理だ。
どうすればいいの……!?
「話がよく見えないが、君は今店を畳むか、店を守る代わりに彼と結婚するかの二択を迫られていると、そういうことか？」
蛭田さんとわたしの顔を交互に見比べながら、塩顔のイケメンが首を傾げた。
初対面のお客さんに、こんな情けない場面を見られてしまって、ただただ恥ずかしい。
頬が熱くなるのを感じながら、この際だからもういいや、とわたしはヤケになって喚いた。
「そうよ、最悪な状況。両親が一生懸命守ってきたお店を畳みたくないし、だからってこの人と結婚するのも絶対無理、考えられない」

この人、と蛭田さんを示すと、彼は心外だとばかりにフン、と鼻を鳴らす。
「なるほど」
感情的なわたしの言葉に、冷静に耳を傾けていた塩顔のイケメン。
「――なら、どちらも選ぶ必要はない」
彼が自信ありげな口調で言い切った。
「選びたくないならどちらも選ばなければいい。この店を続ける方法は、まだある」
すると蛭田さんが、おかしそうに笑い声を立てた。
「これはおかしい。お客さんも人が悪いねぇ。変に慰めて、期待持たせちゃいけないよ。その子、本気にしちゃうから」
「本気にしてもらって構わない」
「ぁあ？」
きっぱりと切り返す彼に、蛭田さんは一転して不機嫌な表情を浮かべた。
けれど、塩顔のイケメンは蛭田さんの態度など意に介さず――というか、むしろ蛭田さんの存在自体がさほど気になっていない様子で、カウンター越しにわたしと真っ直ぐ向き合う。
「い、今の話、本当ですか？　その、この店を続ける方法が、まだ他にあるって」
目の前のこのイケメンは、確かにそう言った。本気にしてもらっても構わない、とも。

彼は小さく頷くと、懐から名刺入れを取り出した。
黒いレザーのそれは柔らかな光沢を帯びていて、高価なものであるのが一目でわかる。
咄嗟に、彼の服装に目がいった。スーツやネクタイ、靴、そして腕時計に至るまで、彼が身につけているものはすべてハイブランドであることが、わたしですら感じ取れる。
――この人はきっと、平凡なサラリーマンじゃない。
名刺入れの中から一枚名刺を取り出すと、彼はそれをわたしに差し出した。
半透明の台紙にブルーの文字が映える、オシャレな名刺だ。わたしはそれをこわごわと受け取り、書かれた肩書きを呟く。
「プライムバード総研……代表取締役、蒲生、朔弥……」
えっ、代表取締役!? この人、社長さんだったの？
でも、初めて聞く社名だ。どういった業種なのかさえ、見当がつかない。
「プライムバード総研の、蒲生朔弥……？　その名前、どこかで……」
ところが蛭田さんのほうは、どうやら社名と彼の名前に心当たりがあるようだった。
しばらく考えたあと、「あっ！」と思い出した様子で声をあげる。
「蒲生って、あの蒲生さん？　『サファイアタワー』に入る飲食店をテコ入れして、売り上げを三倍にしたっていう……」
信じられない、という顔で、蛭田さんは彼の顔を凝視する。

『サファイアタワー』とは、蛭田さんが夜のお店を持つ繁華街の最寄り駅にある、九階建ての飲食店ビルだ。
できたばかりのころは、料理の質の割に価格が高いという理由で、アクセスのよさにもかかわらずあまり繁盛していない様子だった。けれど、いつの間にかテナントが入れ替わったり、営業形態が変わったりして、客足を伸ばしていると聞く。
蛭田さんにとっては、自分の息がかかっている場所での出来事だから、横の繋がりで『テコ入れ』にかかわった人物の名を耳にすることもあったのだろう。
「『サファイアタワー』か、懐かしい。もう二年前になる」
建物の名前を聞いて、蒲生と呼ばれた彼は薄く笑みを浮かべた。
どうやら彼がかかわったのは間違いないらしい。
この人、もしかしてすごい人なのかも……？
「いやはや――プライムバード総研の蒲生朔弥さん。直々にお会いできるなんて、思ってもみませんでしたよ。噂はかねがね聞いていましたが、切れ者の飲食店コンサルタントがこんなにお若い方だったとは、恐れ入りますねぇ」
塩顔のイケメンの正体を知り、蛭田さんの彼に対する態度があからさまに変化した。
業界の有名人に少しでも近づけたらと思っているのだろう。
平らな顔に胡散臭い薄ら笑いを浮かべながら、自分の存在をアピールするかの如くカ

ウンターに身を乗り出した。
「でも、悪いことは言いません。あんたがあの蒲生さんなら、なおさらこんな店とはかかわらないほうがいいですな」
蛭田さんが、忠告とばかりに、首を緩く横に振る。
こうしてふたりが横に並ぶと、身長に頭一つ分以上も差があった。蛭田さんが塩顔のイケメン——蒲生さんを見上げる形で話を続ける。
「大家の私が言うのも何ですがね、この店はお客が寄りつかなくていつもガラガラ。いくら蒲生さんの敏腕ぶりでも、どうにかすることは難しい——いや、無理、でしょうな」
蛭田さんがこちらを一瞥すると、バカにする風に笑った。
彼はわたしの苛立ちを煽るようにさらに続ける。
「僕も初めてここを訪れたときは面食らいましたよ。センスはないわ、薄汚いわ、古いわの三重苦でしょう？」
蛭田さんは同意を求めて、蒲生さんに問いかけた。
「それは、まあ」
「っ!?」
すると、蒲生さんはあっさりとそれを肯定した。

——ちょっと、わたしの味方をしてくれるんじゃないの!?
「そうでしょう、そうでしょう。やはり話がわかる方だな、蒲生さんは」
蒲生さんの返事に気をよくしたのか、蛭田さんは勝ち誇った様子でわたしを見た。
「さぁ、わかっただろう？　大人しく僕の四番目の妻になるんだ。そうすれば、店の家賃は未来永劫こちらで負担してやる。たとえここの先店が繁盛しなくても、ね。……すべてが丸く収まる。むしろ、これ以上ない好条件のはずだ」
カウンターの中にいるわたしと距離を縮めるため、蛭田さんがこちらへ身を乗り出した。依然として、その顔には生温い笑みが貼りついている。
「みやびちゃん、もう待てないよ。今すぐ決断するんだ。新婚旅行はどこがいい？　ハワイか、セブか？　タヒチなんかもいいねぇ。結婚式も盛大にやろう。僕の妻たちも一緒に——ああ、もしかして新しい生活が不安かな？　心配しなくていい。子どもでも産めば、妻たちともすぐに打ち解けて仲良くなれるだろう」
次第に早口になっていく蛭田さん。そのおぞましい台詞に、悪寒が走る。
いい加減にしてよ！　と、また爆発しかけたそのとき——
「今どき政略結婚なんて流行らないだろう、くだらない」
蒲生さんが吐き捨てるように言った。
「何？」

「戦国時代じゃあるまいし、今は自由恋愛が主流だ。店を盾に結婚を強要するなんて、時代錯誤も甚だしい」

「あんたには関係ないだろう！　それに、こちらは何ヶ月も家賃を待ってやってるんだぞ。こんなみすぼらしい、美味くもない菓子なんかを売ってる店、価値がないも同然。本来なら潰したって構わないが、せめてラストチャンスを与えてやろうって話のどこが悪い？」

蛭田さんは自分の低俗な下心を、バッサリと否定されたのが気に食わなかったのだろう。取り繕っていた口調が崩れるのも構わずに言い返す。

すると、蒲生さんの左の眉がぴくりと動き、ちょっと不機嫌そうに顔を顰める。

「彼女の――いや、この店の名誉のために訂正してもらいたい。たしかに古臭くてみすぼらしいかもしれないが、菓子は美味い。それは俺が実際に食べてそう思ったのだから、間違いない。ゆえに、価値がない、という表現は誤りだ」

「だからどうした。客が入ってないのだから、店としての価値はないじゃないか」

「そうは言い切れない。少なくとも俺は、この店の価値が高まる可能性は存分にあると思っている。そして、その方法も教えられる」

淡々とした口調で述べると、彼は口元に微かな笑みを湛えて、わたしに言った。

「この男と結婚せずに、店を続けたいんだろう。三ヶ月もあれば、『ヤミーファクトリー』に取られた客を取り返せる――いや、それどころか、さらなる集客だって可能になる」

わたしを見つめる蒲生さんの瞳は自信に溢れていた。その表情に、ドキッと胸が高鳴る。

「それは面白い！」

すると、蛭田さんがケタケタ、と気色悪い笑い声を立てた。

「『ヤミーファクトリー』以上に客を集めるなんて、あんたも大きく出ましたね。いいでしょう、そこまで言うなら、三ヶ月待ってやってもいい。滞納分の家賃を、三ヶ月後に支払うんだ。まあ、この先の三ヶ月分は特別サービスとしてもらわないことにしてあげますよ。感謝してほしいな。ま、できるものならやってみせなさい――その代わり」

蛭田さんの大きな目が、威嚇するように細められる。

「繁盛しなかったら、みやびちゃんは僕のお嫁さんだよ？　それに蒲生さん……あんたには僕の運転手にでも転職してもらおうかなぁ。そこまで言い切ったからには、構わないよね？」

「もちろん構わない。運転手でも家政夫でも、好きなように使ってくれ」

「ようし、聞いたからな！　なら三ヶ月だけチャンスをやろう。三ヶ月後――そうだな、情けをかけて十月末でいい。その日に、これまで滞納していた家賃三ヶ月分、耳を揃え

て払ってもらうよ。稼げるように、せいぜい知恵を絞るんだな」

「心配無用だ。彼女は渡さない」

蒲生さんは強い口調でそう言うと、カウンターの内側にいるわたしを庇うように片手を伸ばし、蛭田さんと対峙した。

渡さない、という響きに、言葉以上の意味はないとわかっていても、胸がじんわりと熱くなる。

この人は、わたしを蛭田さんから守ってくれようとしているのだ。

そう確信して、先ほど感じた胸の高鳴りが、もう一度蘇る。

「ふん、その威勢も今のうちだな」

まるっきり本気にしていない様子の蛭田さんは、蒲生さんの顔を見上げて鼻で笑うと、踵を返した。

「――みやびちゃん。三ヶ月後の結婚式、楽しみにしてるよ♪」

蛭田さんは扉の手前でわたしを振り返り、寒気がするような笑顔を見せてから、店を出て行った。

「……あの、あんなこと約束しちゃってよかったんですか？」

蛭田さんの気配が遠のいてから、たまらずわたしは声をかけた。すると、蒲生さんはこちらを振り返り、不思議そうに首を傾げる。

「何で？」

「だって……」

逆に、どうしてあなたはそんなに平静でいられるんだ、と思う。この状況をわかっていないんだろうか？

わたしはカウンターに、バンと両手をついた。

「あなた、有名なコンサルタントなんでしょう。うちの店を繁盛させられなかったら、蛭田さんの運転手になっちゃうんですよ。やっぱり無理でしたーなんて言って、許してくれる相手じゃないです」

ああ見えて蛭田さんだっていっぱしの、それも夜の世界の経営者だ。ヤバそうな知り合いだって多いだろうし、仮に約束が果たせなかった場合、なかったことにはできないはず。

「なら、繁盛させればいい」

蒲生さんは、余裕の微笑を浮かべている。

「俺の言う通りにすれば、この店は必ず地域で一番の有名店になる。それこそ、『ヤミーファクトリー』なんて目じゃないくらいにな」

「どうしてそんなこと言い切れるんですか」

うちの店に今日初めてやって来たこの人が、なぜそんな風に断言できるのかが疑問

だった。

「俺がその道のプロだからに決まってるだろう。飲食店を繁盛させるのが俺の仕事だ。俺が繁盛させると決めた店は、絶対にそうなる」

焦るわたしに対して、蒲生さんはマイペースなままだ。

何て強気なんだろう。まだ始める前の段階で、ここまで言えるなんて。

だけど、何故だかわからないけれど、この人が言うなら大丈夫という気になってくるから不思議だ。

「本当に……あの、本当に頼んでいいんですか？　うちのお店、お客さんを呼べるようにしてもらえるんですね？」

わたしは震える声で問いかけた。

この人がどれほど信頼できるかなんて、わたしにはわからない。けれど、八方塞がりのこの状況で、彼の存在だけが唯一の希望だった。

「もちろんだ、任せておけ」

彼が頷いた瞬間、荘厳なパイプオルガンの音色が聞こえた——気がした。

神様はいたのだ。

どうしようもない窮地にもがいていたわたしに、手を差し伸べてくれた。

「あ——ありがとうございますっ。あの、じゃあ……さっそく今の話、両親にもしてもらえませんか？」

わたしは厨房でお菓子作りに励むふたりを思い、目頭が熱くなるのを感じた。

3

「蒲生朔弥さん……と仰るんですね」

「はい」

店舗の二階——先日、両親から無理心中を提案されたリビングに蒲生さんを通し、ソファにかけてもらうと、わたしは父と一緒に彼と向かい合って座った。

父は蒲生さんから差し出された名刺を、しげしげと興味深そうに眺めている。

「今はこういう、透き通った紙の名刺も作れるんですか」

てっきりそこに書かれている肩書きや会社名に対して反応するかと思いきや、名刺そのものへの感想か。ガクッと肩が下がった。

まぁ、お菓子作り一辺倒だった父がコンサル業界に精通しているとは到底思えないから、別にいいのだけれど。

「紙の材質もですが、サイズも結構自由に作れます。通常のサイズよりも一回り小さい

立ち読みサンプル
はここまで